

吉井源太と明治

《9》

幻となつた続編

明治以前は、楮で漉いた紙が一般的だった。それら伝統的な紙の製造方法をまとめた本は、いくつかあった。

しかし明治になると、新しく西洋からもたらされた薬品によって、紙の原料にできる植物の種類が大きく増えた。中でも、江戸時代初期に使われ始めたが、質の良くない紙しか作れなかった三極で上質な紙が漉けるようになったことは、大きな出来事だった。

三極を用いて紙幣用紙が製造されたり、和紙の種類を広げたり、大きな影響をもたらした。新しい薬品や原料によって、新しい紙が開発されていったのだ。ここには源太の働きが大きかった。それらの紙の特徴や製造方法を説明し、初めて

全国出版されたのが「日本製紙論」だったのである。

紙漉きに関する実際の仕事に必要なことが細部にわたって正確に述べられている本が、各地方で必要とされたことは、十分想像がつく。日記によると、「日本製紙論」は明治三十一（一八九八）年に二千部が出版され、二年後には売り切れたようである。

源太は、同三十三（一九〇〇）年五月に、印刷発行もとの東京・有隣堂へ在庫の様子や、再版の予定を問い合わせる手紙を出したらしく、日記に次のような下書きがある。

「このところ各地よりたくさんのご注文があります。昨年までは東北地方からお尋ねがあり、また昨年十一月からは九州地方から

もお尋ねがありますが、今、土佐においては全く売り切れ、一部もない状況です。また再版はできないのかとお尋ねをいたさうとこ

ろもあります。貴店にあります品の様子はいかがでしょうか。再版のご予定をお考えになってはいかがでしょうか」



紙漉きの工程図（いの町紙の博物館蔵の『日本製紙論』復刻本より）

明治以後で、手漉き和紙業者の軒数がピークになるのが同三十四（一九〇一）年だ。同書が、引く手あまたであったことは想像がつく。源太としてもできるだけ活用して欲しいと思ったことだろう。しかし、有隣堂からの再版はなかった。

以後の日記に再版のことは記されていない。その代わりというところだろうか、源太は「日本製紙論」を出版しようという心づもりがあったようだ。

このことが同三十八（一九〇五）年の日記からわかる。協力者として森岡滝馬という人を定め、依頼もすんでいたらしい。内容構成もだいたい決まっていた。「日本製紙論」の抜粋を中心として、大蔵省印刷局の技師だった人の原稿などを

載せる予定だったようだ。題辞は谷干城に依頼しようと考え、面会もしていた。谷は幕末の志士で、後に陸軍中将となり、同十一（一八七八）年に「得月楼」の命名をしている。軍務を解かれてからも要職を歴任、最後は貴族院議員となった。

同三十八年は、源太が亡くなる三年半ほど前にあたる。このころから源太は目を患うようになり、このために続編が実現しなかったのではないかと思われる。

「日本製紙論」はその後、昭和五十一（一九七六）年に五百部限定で復刻されている。現代においてもこの本の意義が認められたということだろう。（京大大学院研修員、京都府在住）